

グローバル化のもとでの台湾における 看護教育と看護師

宮 崎 聖 子

本研究の目的はグローバル化が台湾の看護教育や看護師の移動に及ぼす影響を、ジェンダーの視点から検討することである。方法としては、文献渉猟や看護関係者に対するインタビュー調査（2007年12月，2008年8～9月）を用いた。その結果，以下のことが明らかになった。

台湾では看護師の99%が女性である。台湾における看護労働の人材については，需要よりも供給が上回っている。台湾政府は外国人看護師の受け入れにも自国の看護師の国外送り出しにも積極的ではない。しかし看護教育機関は台湾のWTO加盟を契機に，看護教育の高度化を図り始めた。その一環として，看護職業学校が2005年に学生募集を停止し，また新たに専科護理師の資格が創設された。

国外に移動する台湾の看護師や学生は，経済発展により80年代よりも減少したが，現在も存在する。主な渡航先はアメリカである。台湾の看護師は，仕事のやり方が医師の指示に従属していることや，昇進の機会が少ないことに不満を抱いている。一方，アメリカの看護師の仕事は自律性が高く，またアメリカでは看護師として働きつつ進学する機会を得ることができる。そのため一部の人は，よりよい労働環境を求めてアメリカへ移動するのである。

キーワード：台湾，看護教育，グローバル化，移動，ジェンダー

1. はじめに

グローバル化は看護労働に大きな影響を及ぼしている。目下、フィリピンやインドネシアなどは、国の政策として看護師の国外送り出しを行い、世界から注目されている。しかし同じアジアでも、グローバル化のもたらす影響は、台湾では前二者とは異なる様相を見せる。台湾からは、看護師がよりよい待遇を求めて主としてアメリカに渡っているが、政府が奨励しているわけではなく、数としては少数である。

本稿はグローバル化が台湾の看護教育や労働にどのような影響をもたらしているのかをジェンダーの視点から概観し、それにより、他の国や地域と比較する材料を提供することを目的とする。方法としては、文献渉猟や、台湾における看護関係者に対する聞き取り調査（eメールによる質問も含む。2007年12月、2008年8～9月）による。

すでに台湾の病院や一般家庭には、多くのインドネシアやフィリピンからの家事や介護を行う外国人労働者が定着している。フィリピン人の元看護師が、台湾で介護職やメイド（介護士職メイドについて目下、免許制度はない）として働いているケースは多いが、正確な統計数字はない⁽¹⁾。台湾における再生産労働は、外国出身の女性たちの存在を前提としてなりたっている。彼女たちの多くは台湾の家庭において病人の世話も行っており、その一方でフィリピン国内では深刻な医師、看護師不足が指摘されている。

台湾国内では、グローバル化が看護教育にもたらす影響について2007年から研究が始まった。2007年12月12日に台湾護理学会（看護協会に相当）が開催した「看護労働力の移動問題と政策介入可能性の検討フォーラム」はそれを象徴している（陳2007）。もちろん看護労働や看護教育は、前述したような外国人による家事・介護労働との関連の中に位置づける必要がある。しかしここではまず、いわゆる専門職としての看護と看護教育に着目して、近年の動きを把握する。

台湾は面積36,000km²、日本の九州ほどの大きさで、人口約2,298万人（2008年現在）のサツマイモのような形をした島国である。人口の大部分は漢族系住民で、オーストロネシア語族系の少数民族も存在する。公用語は中国語（北京官話）である。漢族系住民の大部分は、その祖先が対岸の中国福建省や広東省からの移民である。また漢族系住民には戦後、国民党とともに中国大陆から渡って来た人たちも含まれる。宗教については、仏教を信仰する者が多く、生活には道教も根づいており、少数だがキリスト教徒も存在する。

台湾は、1970年代後半から韓国、香港、シンガポールと並んで「アジアの四匹の小竜」と呼ばれ、「台湾の奇跡」といわれる経済発展を果たした。1987年に

は、1949年から国民党によってしかれていた戒厳令が解除され、民主化が急速に進んだ。それと並行して全民健康保険制度など医療福祉制度も整備された。少子高齢化もすすみ、65歳以上人口の割合は1995年の7.6%から2005年には9.7%へと増加した。また平均寿命もいわゆる先進国とほとんど差がないほど伸びている（表1）。

表1 国別平均寿命

	1960年		1970年		1980年		1990年		2000年		2003年	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
台湾	62.3	66.4	66.7	71.6	69.6	74.6	71.3	76.8	72.2	78.4	73.4	79.3
イギリス	67.9	73.7	68.7	75.0	70.2	76.2	72.9	78.5	75.5	80.2	75.7	80.7
アメリカ	66.6	73.1	67.1	74.7	70.0	77.4	71.8	78.8	74.1	79.5	74.4	80.1
フランス	67.0	73.6	68.4	75.9	70.2	78.4	72.8	80.9	75.3	82.7	75.8	82.9
ノルウェー	71.3	75.8	71.0	77.3	72.3	79.2	73.4	79.8	76.0	81.4	77.0	81.9
日本	65.3	70.2	69.3	74.7	73.4	78.8	75.9	81.9	77.7	84.6	77.6	84.4

Department of Health R.O.C. (Taiwan) 2006 p.19より作成

近年の台湾のGNPは3,948億米ドル、一人当たり17,294米ドル、実質経済成長率は5.70%、失業率は3.91%（2007年）となっている。中国との微妙な国際関係のため、台湾が正式な外交関係を持つ国は、パラオやブルキナファソといった23カ国と多くはない²⁾。

2. 台湾における看護師の現状

台湾の看護教育はアメリカ式を採用している。台湾の看護学は、戦後のアメリカの援助により発展し、看護学の先駆者たちはアメリカの教育を受けている。1961年11月、台湾の内政部は看護人員の専門職としての地位を高めるため、大学または専門学校程度の学歴を有する者について、名称をこれまでの「護士」から「護理師」とした。同年考選部³⁾は専門職高等試験（專業職業人員高考）に「護理師」の試験を加え、医師、エンジニアと同等の扱いとした。さらにその後、修士学位を持つ者は「臨床護理專家」（臨床看護専門家 Clinical Nursing Specialist ,CNS）と呼ばれるようになった。さらに1967年、考選部は護士（看護職業学校卒業程度）と護理師の資格試験合格者に正式な免許を発給するようになった。これにより看護の専門職としての地位が確立したとあってよい。当初この免

許の権威は低く、無免許の看護労働者を雇う病院も多かったが、1993年に護理人員法（看護人員法）が実施され、病院などは無免許の看護労働者を雇うことが禁止された（劉2006：16-17）。本稿では、有資格の護士、護理師の日本語の総称として「看護師」と表記する。

2008年10月現在、台湾で働く本国籍の看護師の数は、表2に示したように護理師94,891人、護士26,389人で、女性が99.2%を占める。男性看護師の働く場所は、精神科などに限定されている。看護行政の所管部署である衛生署の2000年のデータによれば、看護師の51.4%が20-30歳であり、66.5%がシングルである。看護師の78%は病院に勤務し、残りは在宅ケア、介護施設、デイケアセンター、保健所、学校、工場、メンタルヘルスのリハビリ施設で働いている。働いている看護師の資格では、近年の資格の高度化を反映し護理師が毎年16%の伸びを示している（Taiwan Nurses Association 2005：11）。ICN（国際看護協会）の121か国の加盟国の52%で看護師が不足しているにもかかわらず、台湾は次項で述べる教育機関の増加と就職先の減少により、看護系卒業生が供給過剰となっている。今のところ、台湾政府は国外からの看護師受け入れも、自国からの送り出しも奨励していない。しかし看護労働や看護界がグローバル化の影響を受けていないわけではない。台湾は2002年にWTO（世界貿易機関）に加盟した。それにより、台湾でも教育というサービス業が加盟国に対して開放される。すると加盟国の外国人が台湾で高等教育機関を設立したり、予備校や留学仲介業も提供できるようになり、現行の看護教育制度も影響を受けざるを得ない（李2002：62-63）。従って台湾政府も看護界も、対応に必死になっているのである。

表2 台湾で働く護理師、護士の数（資格の表記は中国語の原文に従う。）

	護理師			護 士		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計
本国籍 人数	851	94,040	94,891	168	26,221	26,389
外国籍 人数	1	15	16	0	3	3

2008.10 中華民國護理師公会全国聯合会HPより⁽⁴⁾

3. 台湾における看護教育の概要

WTO加盟をきっかけに、台湾政府や看護界は、国際競争力をつけるために看護教育の高度化や学生の少数精鋭化をめざすようになった。ここでいう国際競争

力とは、台湾人が国外でも看護師として就職できるようにすること、外国資本の看護教育機関が参入してもそれに対抗できる教育機関を準備すること、国外の学生をよびこめる教育機関を準備すること、などをさすが、この取組みは始まったばかりである。本項では、台湾における看護教育の概要をおさえておく。

1960年代以降、台湾の看護教育機関数は大幅な伸びを示している。1962年に6か所だったのが、めざましい経済発展により1981年には28か所となった（劉2006：16）。近年は、看護教育の高度化とそれに伴う再編が起き、看護関連の教育機関は表3のような種別となっている。台湾の看護教育体系は複雑であり、2005年以降は図1の通りである。従来、中学卒業後に進学する5年制の看護職業学校（卒業後は護士の資格が得られる）も存在したが、看護教育の充実と高度化を図るため、教育部（日本の文科省に当たる）の決定により、2005年から学生募集を停止した。これらの学校は看護専門学校へ転身したが、それでもなお教育体系の複雑さから、看護人員の質にはばらつきがある。台湾の現職看護師の教育程度については、2000年の時点で34.2%が看護職業学校（2005年より募集を停止）を卒業、23%が2年制の看護専門学校を卒業、25%が5年制の看護専門学校を卒業している。大学卒あるいは在職で2年または4年制の課程をおえた者の合計は16.8%、修士修了以上では1%以下である（Taiwan Nurses Association 2005：11）⁵⁾。

表3 台湾における看護関連の教育機関の区分（2006年）

区 分	一般大学	技術学院	科学技術大学	専門学校
学校数	13	7	5	14

林2007より

大学院博士課程		
大学院修士課程		
大学看護学部（学科）または 技術学院（4年制）看護コース	技術学院（2年制）看護コース	
	看護専門学校 （2年制）	看護専門学校 （5年制）
高 校		
中 学		

Taiwan Nurses Association 2005 p.9より

図1 台湾における看護教育の学制（2005年以降）

台北医学大学の林佳静は、看護関連の高等教育機関の数が充実する一方で、看護師の質と量に関する需要と供給がアンバランスであると指摘する（林2007）。行政院によれば2005年には看護師有資格者185,395人に対して、在職者109,236人であった。すなわち、看護師の資格を有する者の4割は看護職として働いていない。また年間に15,000人の看護系の新卒者があるが、看護師として就職するのは6,000人のみという現状である。理由は、2003年から導入された「健康保険総額制度（予算制度）」により病院の予算が削減され、病院が雇用する看護師を減らし、看護師の職場が減っているためである。その他、近年は資格試験の合格率も低下し、反対に新卒の看護学生で看護職以外の業種に就職する者が増加している。新人看護師の1年以内の離職率も30%に達するほか、現役看護師の80%が転職を考えており、60%が看護師をやめたいと考えている。その背景に、看護師の仕事の肉体的、精神的負担が大きく、労働環境も悪化していることが挙げられる。医療の高度化に伴い、入院患者の病態も年々重いものになっており、多くの人が病院で亡くなる。これらは看護師にとってストレスになるのである。台湾の看護師一人がみる患者の数は少なくなく、深夜勤であれば先進諸外国の3倍以上である（表4）（林2007）。

林佳静は、教育資源の配置のアンバランスも指摘する。看護教育の専門学校では5年制卒の者の進学率が最も高く、2002～2006年で2、3割に達する。大学では2年制の在職コースで進学率が最も高く、やはり2、3割に達する。5年制看護専門学校や大学の卒業生は看護師として即戦力となることを期待されているにもかかわらず、その教育課程は上級学校進学のための準備機関となっているのが現状である（林2007）。

表4 看護師一人当たりの患者数 台湾と先進諸外国の比較（衛生署2004）

	現行の台湾の 病院看護	衛生署や専門家 の提言する人数	先進諸外国 の状況
日勤（8～16時）	7～12	6	5
夜勤（16～24時）	12～20	10	5
深夜勤（0～8時）	15～30	15	5

林2007より

4. グローバル化と近年の変化

では、グローバル化は看護界にどのような影響を与えているのだろうか。ここでは、専科護理師（専門看護師）資格の創設、SARS（重症性呼吸器症候群）の影響、アメリカ看護師資格の取得の状況について概観する。

(1) 専科護理師（専門看護師）資格の創設

前述したように、看護師は人員数については供給過剰であるため、台湾政府は今のところ外国から看護師を受け入れる必要を感じていない。外国人が台湾で看護師として働くには、中国語（台湾の公用語）の国家試験に合格した上で、就業服務法46条による労働ビザの取得も必要であるため⁶⁾、門戸は狭いと言える。中華民国護理師公会全国聯合会（看護師の同業者組合。台湾で看護師として働くには必ず加入しなければならない）の統計によれば、2008年10月現在、台湾で働く外国籍の看護師はわずか19名（女性18名、男性1名）である（表2）。台湾護理学会事務局への聞き取りによれば、これはほとんどが台湾人男性と結婚した中国出身の女性（台湾人の家族の身分のビザ保有者）ではないかということである。

一方、WTO加盟後、人材獲得において外国との競争にさらされるようになり、看護行政や看護教育界は優秀な台湾人看護師の国外流出を懸念し始めている。実際に看護学の雑誌には、外国（オーストラリアなど）の大学の看護学部への入学を勧誘する広告もみられる。前項で述べた2005年の看護教育制度改革は、このような外圧を想定しての看護教育の高度化であり、「量より質」をめざした改革の一環である。2006年に「専科護理師」（専門看護師、Nurse Practitioner, NP）という資格が新たに創設されたのも、このようなグローバル化の動きと無関係ではない。専科護理師とは内科や外科などの分野ごとの専門性を高めたもので、創設の目的は以下のようなものである。(1) 医療、看護の質を向上し、過誤を減少させる。(2) 医療チームの協働により医療と看護の接近を図る。(3) 医師、看護師、患者の関係を改善し、患者本位の医療を提供する。(4) 医師と看護師の分業と協力により、医師の医療サービス、研究、教育の質を高める。(5) 専科護理師の国家標準を確立し、その質の向上を図る。

この資格の創設については、10年ほど前から検討が始まった。もともとは地方の医師不足の問題があり、それを補うために、医師とチームワークを組んで看護に従事できるライセンスが望まれた。専科護理師は、医師にかかる前の患者にアドバイスを与えたり、疾病予防に重点を置くなど、地域医療に貢献することを期待されている。また従来の医師の指示のもとで働く看護師ではなく、その自律

性、独立性を高めた点が特徴とされる。専科護理師の創設は、看護界において1967年に護士と護理師の国家資格が創設されて以来の大きな変化であった。この新資格の創設を中心となって推進したのは、行政院衛生署の護理及健康照護処（看護と健康介護部）である。護理及健康照護処の副処長への聞き取りによれば、看護師の離職率の高さや人的資源が無駄になっている状況を改善するには、さらなる専門化と職務の自律性を高めることが必要であったという。

専科護理師の受験資格は以下の4つの通りで、看護師である者が継続教育として訓練を受ける必要がある。(1) 内科（または外科）の臨床経験が3年以上で、専科護理師訓練病院で6ヶ月以上の専科護理師の訓練を受け修了証書を持つ者。(2) 外国の内科（または外科）の専科護理師の免許を有する者で、台湾の衛生署が当該国の専科護理師の訓練内容を台湾と同等と認める場合。(3) 教学病院（教育・研究を行うことのできる病院）における専科護理師訓練の修了証書を有し、その内容を中華民国護理学会が相当と認める者。(4) 教学病院で「内（外）科専科護理師指導者訓練規範表」の規程により訓練を終え、修了証書を持つ者。2006年12月には第1回の試験が行われ、1,658人が受験、875人が合格した（蔡，王2007）。

(2) SARSの影響

グローバル化は看護師の移動だけでなく病原体の移動にも関与し、それが看護師のあり方に影響している。2003年、台湾ではSARS（重症性呼吸器症候群）が発生した。この時、病院で患者に対応していた妊娠中の看護師がSARSにより亡くなったことは、台湾看護界に大きな衝撃を与えた。SARSが流行した際、医療従事者に払われたボーナスは、医師は一日1万元、看護師は3000元であった。医師の多くは男性である。看護界はこれまで女性運動と関わってこなかったが、この事件で看護師たちは自らの劣位とジェンダーの問題を意識するようになったという。看護師たちは性別役割分業に根ざした差別待遇に抗議の声を上げ、これがきっかけとなり「台湾護理人員權益会」が発足した（劉2006：17）。

(3) アメリカ看護師資格の取得

台湾の看護師の国外への移動は、フィリピンやインドネシアのように多くはない。しかし実際には国外で働くために移動する看護師や、留学先で看護師となる人も以前から少数ながら存在し、現在も存在する。その渡航先は、ほとんどの場合アメリカである。ただしそれは主としてアメリカにいる親戚や知己などのつてを利用したもので、統計もないため、どれだけの人数が出国したのか詳細は不明である。

アメリカは現在、深刻な看護師不足に見舞われている。2005年のアメリカにおいて、外国人の看護師資格試験合格者数の1位はフィリピン人で6,852名、台湾人は8位で222名である（陳2007）。台湾護理学会への聞き取りによれば（2007年12月）、このうち実際にアメリカのResisterd Nurse（日本の正看護師に相当、RN）になったのは半分くらいだという。

ここでは台湾大学医学院護理学系（医学部看護学科）の教員とアメリカの看護師資格をとるための予備校を経営するJ氏（仮名）への聞き取り（2007年12月）をもとに、看護師の国外移動について述べることにする。

台湾大学医学院護理学系は看護教育機関として最も早い時期に、卒業生を国外に送り出してきた。同大の護理学系は戦後に設置され、以来50年の歴史をもち、看護学界をリードしてきた存在である⁽⁷⁾。話をうかがった同学科の黄貴薰講師によれば、台湾大学は1984年に国内で2番目に看護学の修士課程を設置し⁽⁸⁾、博士課程の設置は1997年と最も早かった⁽⁹⁾。現在同学科には一学年に35名が在籍する。修士課程ができる1984年までは、進学のために出国する卒業生は多く、主な留学先はアメリカである。同学科の同窓会の調べでは、50年間に出した1500人の卒業生のうち、300～500人が留学しているという（黄さん談話）。黄さんによれば、留学した人たちは帰国しない限り、アメリカでRNとして働き、大学の教員になっている人もいる。もともと台湾大学に入学する人たちは自己に対する要求水準も高く、また大学側も看護界でリーダーシップをとれる人材の育成をめざしている。しかし近年、留学する人の比率は下がっているという⁽¹⁰⁾。これは、国内の大学に看護の博士課程、修士課程が増えたためである。

次に紹介する予備校は、台湾大学のような教育機関以外の卒業生にも国外移動のチャンネルを用意したと思われる。J氏（仮名）は台北市にS予備校（仮名）を経営している。もともとJ氏は高校の数学教師だったが、1982年にこの予備校を開いた。台北駅前の一等地にビルの3階から7階を借りて経営されているこの予備校は、大学医学部受験や医師免許試験、看護師免許試験、臨床検査技師免許試験などの受験対策を専門にしている。医療に関する予備校としては台湾最大で、業務をほぼ独占している。

J氏がアメリカの看護師資格の受験業務を扱い始めたのは、アメリカ在住の親戚の勧めがきっかけであった。彼の妻の妹は大学の看護学科を卒業後にアメリカへ留学し、修士と博士の学位を取得、今ではアメリカの大病院の副院長になっている。その彼女が1990年に台湾に帰国した際、彼にこう言ったという。「アメリカは非常に看護師が不足していて、しかも待遇は良い。専門性、独立性も高い。どうしてアメリカでライセンスをとるよう台湾の学生に勧めないのか」。1980年代や90年代の前半までは、台湾の人々の国外への移民熱は高かった。国内政治

が不安定で、過去の経験から台湾の将来を楽観できなかったためである。従って、すでに移民している親戚のつてを頼って移民したり、(国費留学生でない限り) 留学先にそのまま居住して帰国しない人も多かった¹¹⁾。国外に出ることは台湾の人にとってそれほど敷居の高いものでなく、「落地生根(生活のあるところであればどこにでも根を下ろす)」という諺は、その心性を表している。

J氏はそこで1990年からアメリカ看護師試験の受験業務を開始した。国内の反響は大きかったが、初めてのことなので、経営はたいへんだったという。予備校で授業を担当する教員はつてを通して探し、教材はアメリカから送ってもらった。アメリカのRNの資格試験は、アメリカ看護協会が主催している。1回目の受験には、J氏自身が予備校生たちを引率してアメリカに渡った。アメリカに出国する際には、「受験」ではビザがおりないので、当初は「観光」の名目で出国した。女性ばかり20名くらいの奇妙なツアーだったという。この時の受験地はロサンゼルスで、二日間の試験日程だった¹²⁾。当時の試験は台湾と同じ「状況問題」で、「—した場合、どうするか」といった設問に、レポートを書く形式のものである。内外科、産婦人科、小児科、精神科、薬学の全ての科目が必修であった。

近年、S予備校では毎年300人がRN試験のためのクラスを受講する。受験した後、合格の連絡をS予備校にしてくれるのはこのうち20人程度だが、J氏によれば、実際には40～50人ほど合格しているらしいとのことである。20名の合格者名簿を見せて頂くと、学歴としては看護専門学校卒の人がほとんどであった。J氏によれば、大学生や大卒者は予備校に来ないで自力で受験するのだろうという。現在アメリカでRNの試験に合格し、さらに英語の試験(International English Language Testing System, IELTS)で一定のスコアをとれば、社会保障番号(Social Security Number, SSN)を付与される¹³⁾。RNであれば、グリーンカードの取得は9.11事件後であっても比較的容易であるという。

彼が当初めんどろをみたのは予備校生が試験に合格するまでで、試験に合格した人は自分で職探しを行った。就職先は主としてアメリカの西海岸と東海岸の都市部に多く、内陸に親戚がいる場合にはそこで働く人もいた。現在彼は、これまでに蓄積された人脈を生かして、受験生にアメリカでの就職サポートも行っているという。その一環としてアメリカでの仕事環境を確認するため、彼は最近ロサンゼルスやテキサスなどに行き、病院においてインタビュー調査も行った。J氏自身でそれをまとめたものが表5である。この表はS予備校の広告チラシにも掲載されているが、その他の資料と比較してみても、記載内容にそれほど誇張はないように思われる。給与についてはアメリカのほうが高いが、物価も相対的に高いことを念頭におく必要がある。

表5 台湾とアメリカの看護労働の比較

	台湾（看護師）	アメリカ（RN）
マンパワー	供給 18,000 人／年 需要 4,000 人／年	アメリカの統計による人手不足の予想 2015年 50万人 2020年 70万人 2050年 150-200万人
給与（平均）	月3～5万元	月12～18万元（2007年の対ドルレートで換算）
勤務時間	44時間制	36時間制、残業代は通常の1.5～2倍
勤務シフト	3交代制 ¹⁰⁴	1. 固定勤務 2. 休日勤 (時給は通常の2倍)
看護師一人当たりの患者数	15～25人	4～8人

S予備校が2007年に作成した広告チラシより

台湾とアメリカを比較して看護師の待遇や仕事内容はどうか、と筆者が尋ねると、J氏は「患者に対する目の配り方は、アメリカよりも台湾のほうが行き届いていると思う。しかしアメリカでは患者のシーツを取り替えたりするのは看護助手が行い、看護師（RN）の主たる仕事は看護計画を立てること。この点が異なる」という。細やかな患者の世話でなく、看護計画の立案を期待されていることは、アメリカの看護職の自律性、専門性の高さともみなされており、後にも述べるように台湾の看護職関係者にそのイメージはかなり浸透している。

ここ数年の変化についてJ氏に尋ねると、アメリカ看護師試験の受験者数は減少しているという。これは前述した台湾大学の看護学科における傾向とも共通する。「台湾の看護人員が国外に移動することが国内の看護教育のカリキュラムに影響するか」と尋ねると、「それは今のところない」、とJ氏は答える。ただし希望する学生のために、大学がS予備校にRN試験対策のためのクラスを開講してくれるよう依頼することはある。その場合、費用は受講する学生が負担するのだという。大学は国際化を要求されているが、今のところ学生の自助努力と外部資源にそれを任せていると考えられる。

5. 看護師諸個人の経験

本項では、看護職関係者諸個人が国外で働くことをどのように見ているのか、調査をもとに紹介する。調査は中国語による半構造的聞き取り、またはeメールの質問に対して自由記述の回答を得る方法で行った。調査対象は、看護師または看護師経験者で26歳から50歳代の女性9名、全て「護理師」の資格をもつ看護師である。アメリカで現在働いている看護師は含まれない。聞き取りの対象者は、知人のつてにより探した。9名のうち5名は現職の公立機関勤務の看護師で公務員でもある。台湾では一般に、公立病院は私立より待遇がよいと言われている。従って、本研究の対象者には一定の偏りがあると考えなければならない。直接聞き取りを行ったのは6名（台北市在住）、質問項目にeメールで答えて頂いたのは3名（台湾中・南部に在住）である。これら情報提供者を以下、インフォーマントと表記する。氏名は仮名で、（ ）は年齢を示す。

質問の内容は、これまで受けた教育や研修と看護の仕事の状況、それに対する感想、将来展望などについてである。9名のうち、アメリカへの留学やそこの労働の経験があるのは1名で、現在は大学の臨床地域看護学部の教員である。他に、アメリカの大学で1年間の在職研修を受けた者が1名おり、現在は公立大病院の看護師長を務めている。

まずインフォーマント全体に共通するのは、多くの人が「看護は重要な仕事であるが、負担が大きすぎる」「患者に良質の看護を提供したいが、実際にはできない」と考えている点である。Hさん（41）は筆者のeメールの質問に対し、「看護は神聖な仕事だが、臨床の仕事は煩雑で負担も大きく、情熱を維持するのは難しい」と書いている。「煩雑さや大きな負担」は、患者の世話や細やかな配慮を期待されていることからくる。すなわち、台湾では他人の面倒をみるという「女役割」の上での成熟度や経験が、看護師の資質として重視される。この資質の重要性については台湾大学の黄講師も言及しているが、しかしこれらが報酬に反映されるようなシステムは整っていない。

大学入試の共通テストの成績で看護師への進路を決めたBさん（26）、親に勧められて看護の学校に進学したCさん（29）を除けば、インフォーマントのほとんどは望んで看護師の仕事に就いた人たちであるが、そのような人たちでも将来的に体力が続くか不安である、と答えている。インフォーマントの多くは公立病院の看護師で、給与は正式雇用であれば20歳代の若い人でも基本給4万円（1元＝約3.6円、調査当時）前後に加えて夜勤手当がつく。例えばある公立病院では、夜勤1日500元、深夜勤は700元なので、1ヶ月夜勤の仕事に入れば、その月は15,000元程度がプラスされる¹⁰⁴。一般事務職の女性の給与が3万円そこそこである

ことに比べれば、悪くない。しかし看護師の仕事はハードで、それでも割にあわないとインフォーマントは感じている。Aさん(26)は、看護師の仕事をしていると、勤務時間の関係から恋人を作ることもできず、結婚も難しいと感じている。実際に彼女の周りには30歳代後半でシングルの先輩も多いという。

夜勤をしなくてもよい場合もある。それは例えば看護師長や看護行政職などに昇進した場合である。ただし看護師長になれるのは、多くの看護師のうちのほんの一握りに過ぎない。Gさん(38)はそのような看護師長になった一人である。彼女は大学の看護学科を卒業後、すぐに台湾大学付属病院で働き始めた。ここは公立で、彼女は公務員の身分である。彼女は仕事をしながら陽明大学の臨床看護の修士課程を修了した。この課程に在学中、勤務先の在職研修制度を利用し、アメリカの大学で研修を受けた。アメリカでの学費は自己負担、生活費は勤務先負担である。彼女はアメリカのNP(Nurse Practitioner)の課程を1年間学んだ。NPとは、より専門性を高めた看護師のことで、台湾の専科護理師はこの制度に倣っている。アメリカのNPの資格を取るにはこの課程で2年から2年半学ばなければならないため、Gさんは資格自体は取っていない。しかし彼女は帰国後、36歳で看護師長に抜擢された。看護師長になると夜勤はほとんどなく(1か月に1回)、負担が軽くなったという。

インフォーマントの多くは将来的には、夜勤のない、または少ない仕事に就きたいという希望を持っている。Gさんの例から分かるように、看護師の仕事を続けるのであれば、学歴社会の台湾では学歴を積むほうが有利である。台北護理専科学校(専門学校)卒のFさん(37)は3年前、仕事をしながら、台北護理学院の2年間の課程を卒業した。これで4年制大卒と同等の教育程度ということになる。彼女は上司の許可を得て通学したが、だからといって日常の仕事の負担が特に軽くなるわけではなかった。ハードな仕事をしながら学位をとることは容易ではなく、途中で挫折する人も実際に多い。なぜ精神的にも肉体的にも困難な進学をしたのかと尋ねると、彼女は「転職に有利だし、また昇進にも学歴が必要だから。今は学歴がないとだめなのよ」と語った。アメリカで働いてみたいと思いませんか、という問いに彼女は「アメリカには行ってみたいけれど、つてが必要だし面倒。書類を揃えるのにもお金がかかる。人種差別もあると聞きます。今の仕事をいったん辞めなければならないし、その間食べていけない。現実的な問題は少なくないわ」と答えた。Cさんは看護師であったが、自分は看護師に向かないし、将来長く続けられない、と判断して看護師をいったん辞め、国内の3年制の修士課程(台湾師範大学の地域保健学)に進学した。将来は週休二日で働ける看護教諭か教員、または研究職になることを希望している。

台湾の看護師や看護界は、看護の仕事に尊厳と自律性が与えられることを熱望

している。アメリカは台湾に比較して看護師の専門職としての自律性が高いと考えられており、それが台湾の看護師をひきつける一つの要因である。インフォーマントの多くもまた、そのように信じている。Aさんは前出のS予備校のアメリカRNの資格をとるためのコースに通ったことがある。費用は1年間5万円で安いとは言えない。そこで出会った人たちについて「どんな人が外国で看護師になると思いますか」とAさんに質問したところ、アメリカ看護師の事情に詳しい友人から聞いた話だとして、彼女は次のように答えた。「(その)友だちが言うには、自分の力量を発揮できて、独立して仕事ができる…台湾は医師のorder(指示)でやらなくちゃいけないからね。そして、尊厳のある仕事をしたい人かしら。アメリカでは1人の看護師が4人の患者を看てる。単独で独立して管理をしているの。」「あなたは、仕事に尊重されていないと感ずることがあるのですか?」と尋ねると、「しばしばです!」と答えた。台湾における看護の仕事の自律性の低さについては、多くのインフォーマントが「医師の指示で(業務を行なっている)」という言葉で表現するところである。今回、看護職団体関係者(全て看護師として勤務経験のある女性)にも取材させて頂いたが、彼女たちも共通の感想を持っていた。

現在政治的に比較的安定している台湾では、フィリピンなどとは異なり、経済的な要因はアメリカで看護師になる大きなインセンティブにはなっていない。研修でアメリカに渡ったGさんによれば、アメリカに行く人には二つのタイプがあると言う。一つはお金を稼ぐために働く金銭追求型、もう一つは看護師となってグリーンカードをとり、そこでさらに進学するという、学歴追求型である。アメリカ留学は一般に費用がかかるが、グリーンカードを有していれば市民として安い費用で大学院に通うこともできる。またアメリカでは看護師の労働時間は比較的短いうえに融通が利くので、働きながら学位を取得するのに有利であるという。

自身がアメリカで働きながら学んだ経験のある大学教員のIさん(50歳代)は、台湾人が国外で働くことに慎重な態度を示している。彼女は台湾の大学を卒業後、1981年にアメリカの大学院(修士課程)に留学し、その後博士の学位も取得。その間、パートタイムの看護師の仕事をして13年間続け、アメリカの大学で教えた経験も持つ。彼女と同時代にアメリカに留学した友人の多くは私費留学で、卒業後もほとんどは台湾に帰らなかったという。Iさんはたまたま数年前に大学の就職口が台湾で見つかり、帰国した。彼女によれば、現在アメリカのエージェンシーが台湾出身の看護師を雇い、看護師のリクルートのために、台湾の大学教員に連絡をとらせてくることも多いという。「彼女たち(アメリカからやって来た台湾人看護師)は、卒業した学生をアメリカに派遣してくれないかと相談してくるのです。普通は(教員は学生が)国外に行くのをストップ、と言わない

けれど、私は違う。私の場合、そのような問い合わせにははっきりノー!とっています。アメリカのエージェンシーは学生を搾取するだけだから。学生はアメリカ（の状況）をとてもいい、と思っています。しかし私もアメリカで看護師として働きましたが、アメリカと台湾はそれほど変わらない。ちょっといいだけ。確かに給与はいいかも知れないけれど、アメリカは物価も高い。行くのにお金がかかるし、アメリカに行っても仕事が見つからずに帰ってくる人もいます。そんな人を何人も知っています。中にはうまくやっている人もいますが…。」

Iさんは、物価の上からは台湾の看護師の待遇が他の国と比べて特に悪いわけではない、と説明した。確かに、Iさん以外の他のインフォーマントも、アメリカに渡ったものの、言語の問題や出身の異なる看護師のいじめなどに遭い、台湾に帰国した友人の話聞いていた。アメリカRNの資格試験に合格しても、移動には様々なリスクが伴うのである。

6. まとめ

1～5項で台湾の看護教育と看護師の状況を概観したが、グローバル化により、台湾政府は優秀な看護師が流出してしまうことを懸念し、看護教育界は少数精鋭の人材育成に力を入れ始めていることが分かった。そのために看護職業学校の募集が停止され、専科護理師の資格が創設された。専科護理師には、そのための訓練コースが用意され、看護師の在職の継続教育に変化をもたらしたといえる。教育機関で行う看護教育の内容自体にはまだ大きな変化は見られないが、新たな資格創設や外国資本の本格的参入が始まれば、今後変化する可能性もある。

台湾における看護労働の状況は、女性が看護職の大部分を占めているため、ジェンダーの問題と重なっている。看護師は専門職とされながら、過酷な労働条件のもとで働いている。すなわち、夜勤を含む長時間過重労働である点、（仕事内容に見合わないと感じる）低い給与、長期間勤めても昇給は少ない点、医師（多くは男性）との関係における仕事の自律性が低い点、そして将来展望が見えにくく教育研修、昇進の機会が少ない点が特徴である。台湾からアメリカへの看護師の移動は、1980年代くらいまでは経済的要因と共に台湾社会に対する不安など政治的な要因も大きかったと思われる。しかし経済的、政治的要因が小さくなった現在でも、看護師や看護学生のアメリカへの移動（学生の留学も含む）は存在する。その理由は、これまでみたように、アメリカの看護職の「待遇の良さ」や学歴を求める目的が挙げられよう。アメリカで働きながら学べば、うまくいけばアメリカに定着できるし、台湾に戻ってもより待遇のよい職、より高い給与を得られる可能性がある。台湾で教育程度が修士以上の看護師は、少数であ

る。従って学歴を高めることは、さしあたって看護界で生き延びる有効な手段となりうる。ただアメリカへの渡航にはある程度の資金が必要で、言葉の問題やその他のリスクも伴う。5項で紹介したインフォーマントの一部は、それを避けて、在職のまま国内での進学を果たしていた人々であった。

本稿は、台湾の看護師と看護教育に関する全体的な把握にとどまっている。今後の課題として、アメリカで現在働いている台湾人看護師の状況の把握や、彼女たちがどのような将来展望を持っているのかを検討することが必要であろう。また台湾では、フィリピンやインドネシアの元看護師が介護士やメイドとして働いている。二点目としてはこれらの人々が台湾社会全体の中でどのように位置づけるのか、再生産労働のより大きな構造の中で台湾における看護師の問題を捉えなおすことである。台湾で起きていることは、日本の看護教育や看護のあり方を捉えなおす契機も提供すると考える。

〔謝 辞〕

本研究の調査に当たっては、国立台湾師範大学の呂昌明教授・今井文子ご夫妻、蔡淑鳳さん（行政院衛生署護理及健康照護処副処長）、徐淑芬さん（台湾護理学会秘書長）、黄貴薰さん（国立台湾大学医学院護理学系講師）、林炳炎さん（科学史研究者）にたいへんお世話になりました。またお名前を挙げることはできませんが、看護関係者の皆さんにはお忙しい時間を割いて聞き取り調査にご協力頂きました。ここに、厚く御礼申し上げます。

本研究は平成19年度 科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号19510285 研究代表者 織田由紀子「グローバル化のアジアの看護師と看護教育 ― ジェンダーの視点から」によってなされた。

（みやざき せいこ 福岡女子大学）

〔注〕

- (1) 台湾におけるフィリピンなど外国人の介護労働者、メイドについては、以下の研究がある。安里2004a, 2004b, 2005, Cheng 2006。
- (2) 外務省ホームページより2009.2.14取得。http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taiwan/data.html
- (3) 考選部Ministry of Examinationは1948年に設立され、公務員試験と専門・技術職試験を実施することなどを主要な業務としている。考選部ホームページより2009.2.24取得。http://www.moex.gov.tw/ct.asp?xItem=1338&CtNode=1243
- (4) 2009年2月13日取得。
http://www.nurse.org.tw/userfiles/file/DataSearch/台閩地區護理人員統計表.9710.xls
- (5) これは2000年のデータであるが、その後四年制大学の卒業生が増加し、大卒の割合は急速

に伸びたと考えられる。

- (6) 台湾の行政院勞工委員會職業訓練局のホームページより2009.2.14取得。
http://www2.evta.gov.tw/evta_wcf/chi0001_page01.asp
看護師（護理師）は「専門性或技術性工作（専門的または技術的業務）」に分類される。外国人が就労するための労働ビザの申請には申請書等いくつか書類を提出が必要で、また外国人労働者の給与は、中央主管機関の公告による額を下回ってはならないとされている。
- (7) 台湾大学は日本植民地期に創設された台北帝国大学が前身で、戦後、国民党の管理下に入り、国立台湾大学となった。
- (8) 台湾で最も早く修士課程を設置したのは国防医学院で、1979年である。
- (9) 調査当時、看護関連の博士課程を設置していたのは5校であった。
- (10) 台湾全体としても、遊学者の数は増えているものの、留学生数は減っている。例えばアメリカ留学は1994年には37,000人あったのが、2000年には29,000人に減少している（李2002）。
- (11) 男性の場合、兵役の終了前は出国が制限されている。
- (12) 2007年からは台北でもアメリカRNの受験が可能となった。
- (13) IELTSは英語習熟度を測る英語検定の一つ。社会保障番号は、アメリカ合衆国において市民、永住者、アメリカ合衆国における社会保障法（the Social Security Act）205条C2に記載された外国人就労者に対して発行される9桁の番号である。
- (14) 聞き取りによれば、台湾では、日勤（8-16時）、夜勤（16-24時）、深夜勤（0-8時）のシフトは1ヶ月ごとに交代する。例えば今月は毎日日勤、来月は夜勤という具合である。

[引用・参考文献]

[英文]

Department of Health, R.O.C. (Taiwan) 2006 "Taiwan Public Health Report"

Taiwan Nurses Association 2005 "Nursing in Taiwan : Visitor's Guide".

Cheng, Shu-ju Ada 2006, "Serving the Household and the Nation : Filipina Domestic and the Politics of Identity in Taiwan" Lexington Books.

[和文]

安里和晃2004a「台湾における外国人家事・介護労働者の処遇について—制度の検討と運用上の問題点」『龍谷大学経済学論集（国際学特集）』第43巻第5号 pp.1-28

安里和晃2004b「国籍別の雇用契約書からみる外国人労働者の実態—台湾の介護労働者を事例として」『龍谷大学大学院経済研究』第4号 pp.55-71

安里和晃2005「移動の世紀の〈再生産労働〉2. 外国人家事・介護労働力の現在—台湾、シンガポールの事例から」オルタートレード・ジャパン／『at』編集室編『at』2号 太田出版 pp.106-123

[中文（画数順）]

行政院衛生署 2006『護理人員法及其相關法規与彙編』

李選2002「台湾加入WTO後，对護理高等教育產生之衝擊与挑戰」『護理雜誌』49-6 pp.61-66

林佳靜2007.12.12「教育面：教育制度对人才遷移之理念」台湾護理学会『護理人力遷移議題政策介入可行性探討護理論壇』於台湾護理学会國際會議厅（台北市）pp.14-28（會議におけるハンドアウト）

陳妙青2007.12.12「政府对人才遷移之理念」台湾護理学会『護理人力遷移議題政策介入可行性探

- 討護理論壇』於台湾護理学会國際會議序(台北市)(會議におけるハンドアウト)
蔡淑鳳, 王秀紅2007「台湾專科護理師的政策制定与發展」『護理雜誌』54-6 pp.5-10
趙可式2004「台湾護理教育評鑑制度初探」『護理雜誌』51-4 pp.22-26
劉仲冬2006「我国的護理發展史」『護理雜誌』53-3 pp.5-20
盧美秀2004「我国護理教育的現況与展望」『護理雜誌』51-4 pp.11-31

The Impact of the Globalization on Nurse Education and Nurses in Taiwan

MIYAZAKI Seiko
(Fukuoka Women's University)

The objective of this study is to examine how the globalization (of labor) influences nurse education in Taiwan and migration of Taiwanese nurses from gender perspectives. The methodology of this study involved the author's interview with those in the field of nursing (conducted in December 2007 and between August and September 2008) and an extensive bibliographical study, which revealed the following findings :

With respect to nurse education, a difference was observed between the view of the Taiwanese government and nurse education institutions. Women represent 99% of nurses in Taiwan, where supply of nurse labor exceeds demand. The Taiwanese government is neither willing to accept foreign nurses nor send Taiwanese nurses overseas. By contrast, nurse education institutions in Taiwan, upon Taiwan's accession to WTO in 2002, launched the advancement of nurse education. As part of this reform, in 2005, vocational nurse schools stopped accepting students and instead Taiwanese government created a new nursing license for nurse practitioners.

Second, in the 2000s, the number of Taiwanese nurses and students migrating outside Taiwan decreased as a result of Taiwan's economic growth, compared with the 1980s; however, such migration of nurses and students continues today. Their major destination is the U.S. Many Taiwanese nurses are dissatisfied with the fact that they are obliged to work under the directions of medical practitioners and that they have less opportunities for promotion. On the other hand, registered nurses in the U.S. are offered more independence and opportunities to go on to higher schools while working as a nurse. For this reason, some Taiwanese nurses choose to migrate to the U.S. seeking better working conditions.

Keywords : Taiwan(ROC), nurse education, globalization, (labor) migration, gender